



久留米展 特設サイト



写真展

造船記

Masaya Noda

野田雅也

「やんねばなんねえ」船大工たちは声を合わせた。

第43回土門拳賞(2024)最終選考作品

2024年 9月18日(水)・22日(日)

石橋文化会館 市民ギャラリー「みゆ〜ず」 10:00-17:00 入場無料
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015 TEL 0942-33-2271

主催 写真展『造船記』実行委員会

後援 久留米市教育委員会 / 西日本新聞社 / 読売新聞社 / 久留米連合文化会

協賛 井上千代子/猪口工業/牛島燃料店/オステリア・ロース/集広舎/久留米札幌ラーメン
久留米市歴史史跡愛好会/小柳治夫/第一法律事務所/高橋明子/つるてん八賀米
野村織物/服部印刷/樋口明男/水城一美/了徳寺

お問合せ 筑後地域文化誌「あげな・どげな」 TEL 090-1218-2105

2011年3月11日、東日本大震災に見舞われた岩手県大槌町——。ひょうたん島(蓬萊島)のある大槌町は鮭の定置網漁や養殖業で栄えてきた。漁師町の復興に「船」は欠かせない。震災の日から11年間、復興の足跡を久留米市出身の写真家が記録した貴重なフォトストーリー。



ひょうたん島（蓬莱島）のある赤浜の岸辺で、瓦礫から工具を拾い集める船大工に出会った。大槌湾に面した岩手造船所は津波で壊滅し、流された船は陸に打ち上げられたり、海上を漂流したりしていた。船大工は、「あの船さ、おらほの方から流れたべ」と屋根の上に乗った観光船を見上げた。漁師町の復興に、船は欠かせない。「やんねばなんねえ」、船大工たちは声を合わせた。町に暮らしの明かりが灯る日を夢見て、途切れることなく復興の槌音を響かせ続けた。

今、夜空の下に街明かりが輝き、蓬莱島の灯台は海を照らす。家族や仲間を失い、悲しみや苦しみを乗り越えても、さらに困難は続いた。しかし船大工をはじめ、町の誰もが、誰かの明日を想い、支えあい、新しい町を築き上げた。写真集『造船記』は、東日本大震災から復興までの不屈の歩みをたどる船大工たちのクロニクル。



9月21日(土)
石橋文化会館1階会議室

写真展特別企画 スペシャルトーク 14:00～ 入場無料

「記憶を記録すること」と

写真家

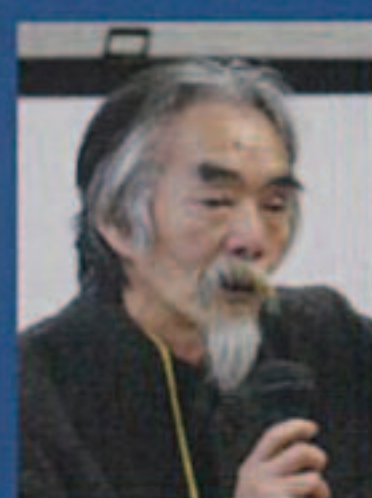
藤田洋三氏

西日本新聞記者

× 田竈良太氏 ×

写真家

野田雅也



藤田洋三

1950年大分県生まれ。別府市在住。写真家。幼い頃から職人仕事に興味を持ち、1976年より大分を拠点に、全国の鍛冶、土壁、石灰窯、墓塚、石積み等の撮影と取材を続けている。著書：『近代建築史 ゲニウス・ロキ』（編著、産研出版、1993）、『消え行く左官職人の技・鍛冶』（小学館、1997）、『世間遺産放浪記』（2007）、『世間遺産放浪記 俗世間編』（2012、以上石風社）



田竈良太

1980年、福岡県小郡市生まれ。2004年に西日本新聞社入社。社会部、佐世保支局、久留米総局、編集センター、東京報道部などを経て、現在、報道センター。ニュースメディア「西日本新聞me」に携わる。



造船記

11 Years from the Date of the Disaster March 11, 2011 - March 11, 2022



野田雅也（のだ・まさや）

1974年、福岡県久留米市生まれ。写真家・映画監督。福岡大学在学中から世界を放浪し、写真を始める。ライフワークとしてチベットを撮影、世界情勢や地球環境を取材して国内外で報道記事や映像作品を発表する。日本写真家協会(JPS)会員、日本ビジュアル・ジャーナリスト協会(JVJA)会員。写真集に『造船記 Chronicle of a Shipbuilder』（集広舎）、『災害列島・日本』（扶桑社）、『3・11 メルトダウン』（凱風社）。ドキュメンタリー映画に『遺言 原発さえなければ』（2014）、『サマショール遺言第六章』（2018年）、『ふるさと津島』（2020）など。

<https://masayanoda.com>

造船記 ミニ写真展開催

8月15日・9月15日

※期間中、市内の下記飲食店内にて展示します。

イタリア料理 Cento
OSTERIA LOTOS
久留米札幌ラーメン
つるてん八賀来



amazon

写真集 造船記

¥3,850 (税込)

好評発売中

